

第13回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「鬼の子トキ」

埼玉県立浦和第一女子高校 3年 上田 侑乃



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

優秀賞〈銀の星賞〉

鬼の子トキ

埼玉県 浦和第一女子高等学校三年 上田 倖乃

その日は、朝なのか昼なのか、夜のかも分からぬほど、どんよりと暗い日でした。病院の窓から見上げると、重たそうな黒い雲が、もこもこと空一面に敷き詰められて、今にも落ちてきそうでした。庭の植え込みにはなんの花もなく、地面もただ灰色にじっとりと湿っています。見てるだけで、なんだか息苦しくなるようでした。

良太は窓をからからと閉め、白いベッドに寝ているお母さんの方を振り向いて、小さくため息をつきました。良太のお母さんは体が弱く、明日には大きな手術を控えて入院しているのでした。良太は大好きなお母さんが心配でしたが、昨日お医者さんが、手術をすることがお母さんの病気には一番良いのだと、良太とお父さんに説明してくれました。しかし、今日の天気がこれでは、明日の手術はきっと上手くいかないんじゃないかと思えてきます。お母さんの顔をのぞき込むと、汗ばんで真っ赤になつたお母さんが、良太に微笑みかけました。そんなお母さんに、良太は優しく声をかけました。

「僕、今日も神社に行つてくるから

「今日も行つてくれるの?」

お母さんがかすれた声で言いました。

「うん。今なら雨降つてないし、早く行つとかないと途中で降りそだからさ。お父さん来たら、すぐ帰るつて言つといてよ」

窓の方を見やりながら良太が言うと、

「分かった。ありがとう。お天気悪いなら傘持つて行きなさい」と、お母さんは寝たままの格好で首を横に伸ばし、

「あれ、私の傘。持つてつて

と指さしました。殺風景な病室の隅に立てかけてある傘はお母さんの好きなピンク色だったので、ピンクかあ、と良太は一瞬迷いましたが、結局持つて行くことにしました。





良太には、お見舞いの帰りにいつも必ず行く所がありました。それは、病院から出て家とは反対方向に歩くと見える、小さな山の中に立つ、これまた小さな神社でした。手入れもされていないので汚く、所々壊れた寂しい神社で、しかも良太はこの神社に自分以外の参拝者がいるのか、どんな神様がいるのかすら知りませんでした。しかし、なんとなく毎日ここに来て、お母さんの病気が治りますようにと五円玉をお賽錢箱に投げました。

今日もふうふう言いながら山を登つて良太が神社へやつてくると、いつもと神社の様子が違います。お賽錢を投げる前に鳴らす大きな鈴が、いくら綱を揺らしても鳴らないのです。変だなと思って上を見ると、なんと鈴だけそつくりなくなっているのでした。昨日まではあつたのに、誰が取ったのだろう、もしかして落ちて転がっているのかな、と良太が辺りをきょろきょろすると、境内から勝ち誇ったような大きな声がしました。

「お探しの品はこれかい、このうるさい鈴だろ。こんな毎日鳴らして一体何が楽しいんだい !!」

良太がびっくりして振り向くと、さび付いた鈴を小脇に抱えて仁王立ちしている、良太と同じくらいの背丈の男の子がいました。

「お、お参りだけど

良太は急に怒鳴られたので驚いて、震える声で答えました。すると、今度はそれを聞いたその子も驚いたようにぽかんと口を開けて、「お参り? ここに?」

と言うのです。その子は田をまんまるにして、鈴を抱えたまま境内を降りて、良太の前の賽錢箱にぴょんと飛び乗つたので、賽錢箱がみしっと音を立てました。目の前で穴が開くほど見つめられて良太はどぎまきしてしまいましたが、明るいところに出てくれたおかげでやっと良太にもその子の姿がちゃんと見えました。そして、その子におかしな所があると気づいたのです。ぼさぼさの黒い髪の毛。そこから何か尖つた物が頭の上から一本、突き出ています。暑い日ではないのに、汚いズボン一枚で、胸ははだか。鈴を持つ手は爪が伸びていて、鮮やかなピンク色。手だけではありません、顔も、足も、はだかの胸も、その子の体はペンキをかぶったかのように、丸ごときれいなピンク色だったのです。



「君……君、何？」

見たこともない姿に良太はすっかり度肝を抜かれ、ぱくぱくする口からやつと出た言葉はそれだけでした。ピンクの子供は答えずに、「お前、どつかで会った？」

とつぶやきました。良太が目をぱちくりさせ、「いや……知らない」

と言ふと、ピンクの子供はフンと鼻を鳴らして言いました。

「俺はこの神社に住んでる鬼の子。お前さ、この神社にお参りなんかしたつて無駄だよ、神様なんてとっくのとうにいないんだから」

そう言うと鬼の子は、賽銭箱から良太の横へひょいと降りました。

「え……？」

「空き家になつたから俺が勝手に住んでるんだ。静かでいいよ、ここは！でも最近はお前が毎日やってきて、ぼろい鈴をガランガラン鳴らして、うるさいったらありやしない。俺にお願いなんかされても叶えてやる力なんてないんだから、もう来ないでくれ！！」

鬼の子の耳を疑うような言葉が良太の心に次々と突き刺さりました。この神社に神様はいなかつたのです。今までお願いしてきたことは無駄だったのです。真っ黒な空からついに雨が降り出しましたが、良太は気付かせんでした。鬼の子が良太の手から勝手にお母さんの傘を取り上げて、二人の間に広げました。良太は真っ青でした。頭の中で、ただただお母さんの顔が浮かんでは消えます。手術は明日……気づくと良太は泣き出していました。

急にわあわあ泣き出した良太を見て、鬼の子はうんざりだといった様子です。

「ああやだやだ、これだから人間は！ 自分の思い通りに行かないとすぐこれなんだから、嫌なんなるよ。僕が働いている地獄でもね、悪い人間が、反省しないでずっと泣いているだけさ。地獄にはそんなやつばかりだ。天国には良い人間ばかりがいるとか聞くけど、良い人間がいること自体が信じられないね！」

好き放題言う鬼の子に、良太は泣きながら腹が立つてきました。良い人間がないだなんて、なんだか大好きなお母さんまで悪い人だと言われたようで、悔しかつたのです。

「僕は、自分のために、お参りしてたんじゃ、ない！」

良太は泣きながら叫びました。

「僕のお母さんが、病氣で、手術で、大変で、それで、成功しますようにつて……」

嗚咽^{おえつ}で言葉が途切れ、息が苦しくなつて、それ以上良太は何も言えなくなつてしましました。唇をかみしめて鬼の子をにらみつけると、鬼の子は少しばつが悪そうに、

「でもさ、そんならお賽錢は5円玉ばかりじゃない。お母さんのためにしてはけちだなあ」と言いました。

「それは……？」

「『ご縁があります』って……神様と」

鬼の子はまたぽかんと口を開けました。良太は少し恥ずかしくなつて下を向きました。

「そんな意味だつたの？」

鬼の子があきれ果てて聞きます。良太がうなずくと、鬼の子は……笑い出しました。

「あははは！　おつもしろいなあ！　それじゃあ、自分以外の人のために毎日山を登っていたのかい？　君みたいな人間は初めて見たね。さつきは酷いことを散々言つて『ごめんよ。君ならいつでも歓迎さ！』

鬼の子は嬉しそうに笑います。しかし、良太に嬉しい事などありません。「もう来ないよ」

小さい声で言いました。

「神様がいないなら、お願ひ事をしても仕方ないじゃないか。僕はお母さんの病氣を治したいんだ」

良太は鬼の子の手から巻を取り返すと、ぐるりと背を向け帰ろうとしました。すると、

「それなら良い方法が一つだけあるよ」

鬼の子がゆっくりと言いました。良太が振り返ると、鬼の子は



「僕が、天国勤務の鬼になればいいんだ。鬼にとつてね、天国で働くことはとっても珍しくて、すごいことなわけ。だから天国へ行く前に、『褒美』して何でも一つ願いを叶えてもらえるんだよ。そうしたら君のお母さんも元気になれるさ」

「そういつてにかつと笑いました。良太はその申し出に驚きました。

「でも、せつかくの『褒美』を僕のお願いのために使ってくれていいの？」

「別にいいよ。俺、ずっと地獄で働いていたから、良い人間というものを見たことがないんだ。鬼はみんなそうだよ。天国に行つて、良い人間ばかりの所で働くことになれば、きっと楽しいんだろうなって、小さい頃から思つてた」

鬼の子は楽しそうに目を細めました。

「ほんとはね、俺も昔はそのことをお願いしにここに来てたの。でも、がつかりだつたぜ、ここに誰もいなつて分かつた時。あんまりむしゃくしゃしたから、思い切り暴れて、所々壊して、ここに居座つてやつたんだ」

そう言うと鬼の子は少し黙つて辺りを見回しました。つられるように良太も神社の周りをぐるりと眺めました。半分無くなつた狛犬や折れた鳥居は痛々しく残つて雨ざらしになり、割れた石畳には水がたまっています。鬼の子が落胆と怒りのあまり暴れ回つている姿が、良太の目に浮かびました。良太は鬼の子に協力してやろうと思いました。

「ねえ、いつまで傘さしてるの？」

急に鬼の子がクスリと笑います。良太が空を見上げると雨はどうにやんできました。お母さんの傘をたたみながら、良太は鬼の子に尋ねました。

「君、名前はなんて言うの？」

「俺？　俺は、トキ。良い名前だろ。お前は？」

「良太。良い名前だろ。それで、トキ、君が天国に行けるようになるには、何をどうしたらいいのかな？」

それを聞くと、トキはぱつと目を輝かせて、言いました。

「手伝つてくれるんだね？　嬉しいよ。鬼が天国へ行くためには、優しい心に触れた事を思い出さなければならないんだ。それが難しいんだけど」「優しい心？」





「そう。二〇の世の命はね、みんな誰かの優しい心に触れて生まれてくるんだ。鬼だつて同じだよ。でも、鬼はそれを忘れてしまう。ううん、忘れてしまつたから地獄で働く鬼になるんだ」

つまり、トキがいつか誰かに優しくしてもらつたことを思い出せればいいのです。トキは今までずっと地獄にいたのですから、地獄に何か手がかりがあるかもしれません。良太がトキにそう言つと、トキは良太を地獄に案内できること言い出しました。

「地獄に行くの!?」

「そうだよ。大丈夫、お前は俺の案内で行くんだし、地獄では二〇と時間がずれてるから、夕方までには帰つてこれるんじゃないかな」

トキは涼しい顔で答えます。余裕たっぷりなトキの様子を見て、良太は少し怖いけれど、案内してもらうことにしました。

地獄への入口は、境内の奥にありました。緩んだ床板をトキが外すと、その下には地面ではなく、真っ暗な大きい穴があつたのです。

「俺につかまつて。離れちゃだめだよ」

トキが言いました。良太は無言でうなづきました。今から地獄へ行くのだと思うと緊張で声が出せなかつたのです。

「いい? 行くよ? いち、にい、……さん」

良太とトキはお互いにしつかり抱き合いながら、穴へ飛び込みました。そして、真っ暗な穴を長い間落ち続けました。あんまり時間が長すぎて、最初のほうは良太も心臓が止まりそうでしたが、そのうち慣れて、下から「うごうと吹く風を心地よく思いました。しばらく落ち続けると、真っ暗な足元にぽつんと現れた灰色の点がどんどん広がつて、それが河原だと分かるまでになりました。

「着地だ!」

トキが叫び、良太が下を見ようとした瞬間、

バシャー———ン!!!!

二人は灰色の水の中に飛び込みました。良太が浮き上がるうともがいでいると、力強い何かに腕を引っ張られ、良太はすぐに水面へと引きずりだされました。

川辺で四つん這いになり、ぜいぜいと息を整えていくと、

「一体何のつもりだ……！」

野太い声が頭の上で響き、横で

「あいたつ！」

というトキの声が聞こえました。顔を上げると、横でトキが真っ赤な鬼にげんこつをされました。

「またお前か！ 三途さんずの川に飛び込むなんていだずらが過ぎるー。」ーに近づくな！」

トキは頭を押えて涙目になつていました。

「さつやと出て行け !!」

赤鬼に追い立てられ、良太とトキは急いで川を離れました。

「こんな所に優しい心なんてあるはずないよ。みんな俺が嫌いなんだから口をとんがらせてトキがつぶやきます。地獄が嫌で、天国に行きたいという鬼は変わり者だと思われて、仲間はずれにされるのだそうです。

「優しい心……トキ、今まで誰かにご飯を作つてもらつたこととかないの？」

「鬼にご飯はいらないからね」

トキはむすっとして答えます。

「誰かに遊んでもらつたことは？」

「ない」

「誰かに励ましてもらつたり、看病してもらつたり、褒めてもらつたり……」「ないない」

それでは今まで、トキはどうやって地獄で暮らしてきたのでしょうか。あつちに行つてもこっちに行つても、良太とトキは追い出されました。地獄の鬼達はみんな、トキの仲間のはずなのに、トキを目の敵にしていました。棍棒こんぼうを振り回してくる鬼さえいました。

足が棒になるまで二人は地獄を歩き回りました。しかし、優しい心どころか、トキに普通に話しかけてくる鬼すら一人もいませんでした。トキは肩を落としていました。

「もう帰ろう」

トキは力なく良太に言い、良太の手を引っ張つてそばの地面に大きくあいた穴に身を投げました。良太があつと声を上げる間もなく、二人はくるくる回りながら穴の底へと落ちていきました……



良太が目を開けると、そこは夕日に照らされたあの寂しい神社でした。折れた鳥居が、毎晩と同じ姿のままオレンジの光の中にしんと立っていました。良太はその鳥居の足下に、一ひらに裸の背を向けて小さく丸まっている、トキを見つけました。

「『めん』

良太が近づくと、トキが小さな声で言いました。

「お母さんのことは諦めて。俺も天国の事は諦める。俺は地獄でも嫌われ者だし、人に優しくしてもらつたことがあるのに、思い出せないような奴なんだ。俺には地獄の鬼がお似合いなんだ」

良太は何を言つたらいいのか分かりませんでした。トキの肩が小さく震えています。泣いてるのかな、と良太は思いました。気づくと良太は、こんなことを言つていました。

「僕はトキのこと、好きだよ。君、ほら今、夕日に輝いてすっごく綺麗なピンク色してる。お母さんがずっと前に教えてくれたことなんだけど、今の君みたいな色のことを鶴色ときっていってね、お母さんの大好きな……」

言った瞬間、あれつと良太は思いました。トキも、そつと良太を振り向きました。良太の言葉が、トキがずっと忘れていた、ある日の出来事を思い起させました。

「……それ、俺、前におんなじこと、言われたこと、ある……」

トキが目を見開いて、ゆっくりと言いました。

トキは、ずっと前に、間違えて三途の川まで連れて来られた女の子の事を思い出していました。地獄の鬼達の誰からも仲間に入れてもらえず、トキが川辺でくすんくすんと泣いていた時の事でした。

『私は、あなたのことが好きよ。気づいてる? あなたつて、とても綺麗なピンク色をしてるのよ……』

『こういう色を鶴色っていうんだって、お母さんが言つてたわ。名前が無いの? ジャあ、私はあなたを、トキって呼ぶわ』

女の子が、トキの涙を拭ふきました。そうして笑つた顔は、どこか良太の面影がありました。重い病気で来たけれど、まだ寿命が残っているからと、人間の世界に送り返された女の子。



「鶴色……トキ、だから……俺はトキつて言うんだ!! 良太！ お前のお母さんだー！」

良太は急にトキが興奮し始めたのでびっくりしてトキを見つめていました。トキの言葉はだんだんと早口に、甲高い悲鳴に似たものになつていき、最後には叫び声に変わっていました。

「俺に初めて優しくしてくれた!! 思い出したぞ!!!!!!」

その瞬間、あたりが急に真っ白なまばゆい光に包まれ、トキのピンクの体も見えなくなりました。良太は急な光に目がくらみ、慌てて左腕を両目に押し当てる右手でトキを掴もうとしました。しかし、さっきまで目の前にいたはずのトキを捕まえることは出来ず、手は空を掴むばかりでした。

卷之三

良太が叫ぶと頭の中の遠くの方で（良太ありかど）と（エギの声か
聞こえたような気がしました。意識がふうっと遠のいていき、良太の全身か
ら力が抜けました……

「お母さんも小さいころにトキに会っていたなんて、なんだか不思議だなあ」「私も、トキも鴉色なんて言葉も、忘れていたけどね。でも、だからきっと私、ピンク色が好きだったのよ」

あの後、なかなか良太が帰ってきて来ないので心配したお父さんが良太を捜しに来ると、良太は賽銭箱の前で気を失い倒れていたのです。気がついた良太がいくら神社を探してもトキの姿は見えず、緩んだ床板の下の穴は消え、しつかりした地面だけがありました。どうやらトキは本当に、天国へ行けたようでした。

よならも言つてなにから

お母さんがにこりと笑います。お母さんはトキの事をなんとなく覚えていました。良太が神社での不思議な出来事を話す間、お母さんは楽しそうに、そして少し懐かしそうに、頷いたり微笑んだりするのでした。お母さんの体調はトキのおかげかずつと良くなり、お医者さんももう大丈夫だと言っています。

賢治のまちから

高校生☆讀書大賞



「鈴もちゃんと元通りについてたからな。鳴らしてやるうよ、思つつきつう
るさく」

「ガランガランってね」

二人で声を上げて笑いました。雨上がりの、透き通った美しい曇下がりで
した。病室から見える庭の植え込みには、いつの間にかピンクのアジサイが
幸せそうに花を咲かせており、遠くの空には虹が出していました。